

## カンボジアの子ども達的生活意識 : 中学生の場合

横山, 正幸  
福岡教育大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/26717>

---

出版情報 : 生活体験学習研究. 11, pp.55-62, 2011-01-20. 日本生活体験学習学会  
バージョン :  
権利関係 :

# カンボジアの子ども達的生活意識

中学生の場合

横山 正幸\*

## The Consciousness of Daily Life by Children in Cambodia

The Case of Junior High School Students

Yokoyama Masayuki\*

### 1. はじめに

日本では、今、所得格差の問題が政治の大きな課題となり、新聞やテレビでも頻繁に取り上げられている。確かに貧富の差が広がってきていることは否めない事実である。しかし、世界に目を向けると、日本でいう格差など格差のうちには到底入らないという、貧しい国がたくさんある。

カンボジアもそうした国の一つである。因みに国際連合に加盟している192ヶ国の中でわが国の一人あたりのGDP（国内総生産）は、35,757ドルで、世界第14位（2005年度）である。これに対してカンボジアのそれは430ドル（2005年度）で世界第154位、日本の83分の1である。また、日本の国家公務員の平均年収は51,900ドル（2005年度）だそうだが、カンボジアのそれは600ドル程度で日本の約87分の1に過ぎない。物価が低いとはいっても人々の生活は大変苦しい。

カンボジアは、かつてはインドシナ半島の大部分を領土としたこともある高い文化と経済力を誇る帝国であった。しかし、19世紀末にはフランスの植民地となり、その後1953年に独立したものの米ソ対立の冷戦のなかで翻弄され、激しい内戦が長い間続いた。その結果、国は崩壊し、上述のように世界の最貧国の一つになったのである。この10数年、カンボ

ジアは国連を中心とする各国の支援により治安も経済もかなり安定、発展してきた。

しかし、そうは言っても首都プノンペンの街の様子は、まだ1950年代の日本といった感じである。首都のなかに何ヶ所も広大なゴミの山があり、そこでは、日々の生活の糧を得るためにたくさん子ども達が働いている。スラムもあちこちにある。仕事のない農村部の状況は一層深刻だ。また、カンボジアには多くの孤児（0～17歳）がいる。その数は、ユニセフの2005年度の報告によると、実に67万人ということである。子ども達の栄養状態も厳しく、ユニセフの報告では、5歳以下の子の50%が栄養不良で、10人に1人が1歳になる前に死亡、7人に1人が5歳になる前に死亡するとも言われている。

貧しさのために就学できない子どもはまだ少なくはない。そうした子ども達の多くは親を助け、よく働いている。しかし、1日のその稼ぎは100円にも満たないという。また、貧しさの故に人身売買も珍しくはなく、まだあどけない女の子が信じられないような安い値段で売り買いされているという現実もある。

こうした貧しく、苦しい生活のなかでも、表面的に見る限り子ども達や若者達の表情は概して明るく、前向きに生きている感じがする。実際にはどうなのだろうか。筆者はその実態を明らかにするために、

\*連絡・別刷り請求先

〒811 - 4174 福岡県宗像市自由ヶ丘西町9 - 4 (9-4 Nishimachi, Jiyugaoka, Munakata-shi, Fukuoka-ken, Japan 811-4174)

E-mail : yoko41@jcom.home.ne.jp

簡単なアンケート調査を実施してみた。ここでは、その結果を既存の日本の子ども達についてのデータと照らし合わせながら見てみたい。

## 2. 調査の方法

- (1) 調査対象：カンボジア王国カンダル州キエンスヴァイの町にあるロティアン中学校の2年生62名
- (2) アンケート：調査は、質問紙法で行った。質問紙は、生活リズム、手伝い、学校や先生に対する意識など子ども達の基本的な生活と意識を問う質問、計12項目で構成されていた。
- (3) 実施の方法：教室で授業時間の一部を借りて実施した。実施にあたっては、質問紙の質問を1項目ずつ、読み上げ、全員が回答項目をチェック、あるいは文章で記述したことを確認しながら進めるようにした。
- (4) 実施の日時：2008年5月2日

## 3. 調査の結果

### (1) 生活リズムについて

日本の場合、11時以降就寝の子が中学2年生で78.0%（北九州市立教育センター、2005）、起床時

刻については7時以降が53.4%を占めている（福岡県岡垣町教育委員会、2002）。極めて遅寝、遅起きの傾向が強いと言ってよいだろう。当然睡眠時間は短くなる。福岡県（2001）の調査によると、睡眠6～7時間以下の子が中学2年生で75.7%にも達している。これに対して、カンボジアの中学生では11時以降の就寝は皆無で、9時以前が64%を占めている（図1）。また、起床時刻については7時以降は全くいない。非常に早起きで6時以前が87.3%となっている（図2）。睡眠時間も8時間以上という子が88.2%と、驚くほど高い割合を示している（図3）。なお、日本の子ども達も1947年当時は、小学校6年生男子の場合で、平均10時間25分寝ている（園原太郎他、1952）。

### (2) 手伝いについて

手伝い体験をすることにより、子どもは親や色々な人々が自分のためにしてくれることの意味や生活の技能を知るようになる。また、自分がかげがえのない家族の一員なんだという感覚と共に有能感や自尊心を高めることにもなる。ところが、日本の子ども達、特に中学生の場合、概してあまり手伝いをしていない。例えば、北九州市教育委員会（2000）

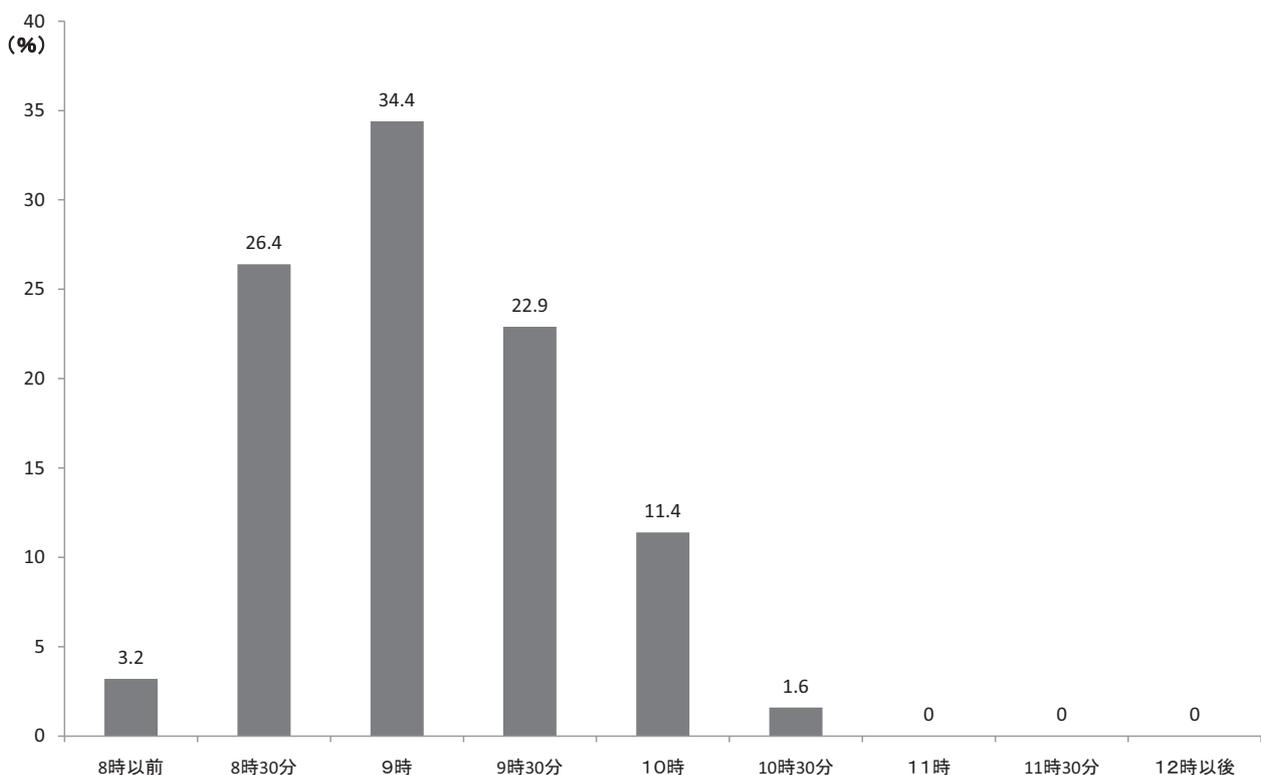


図1. 就寝時刻

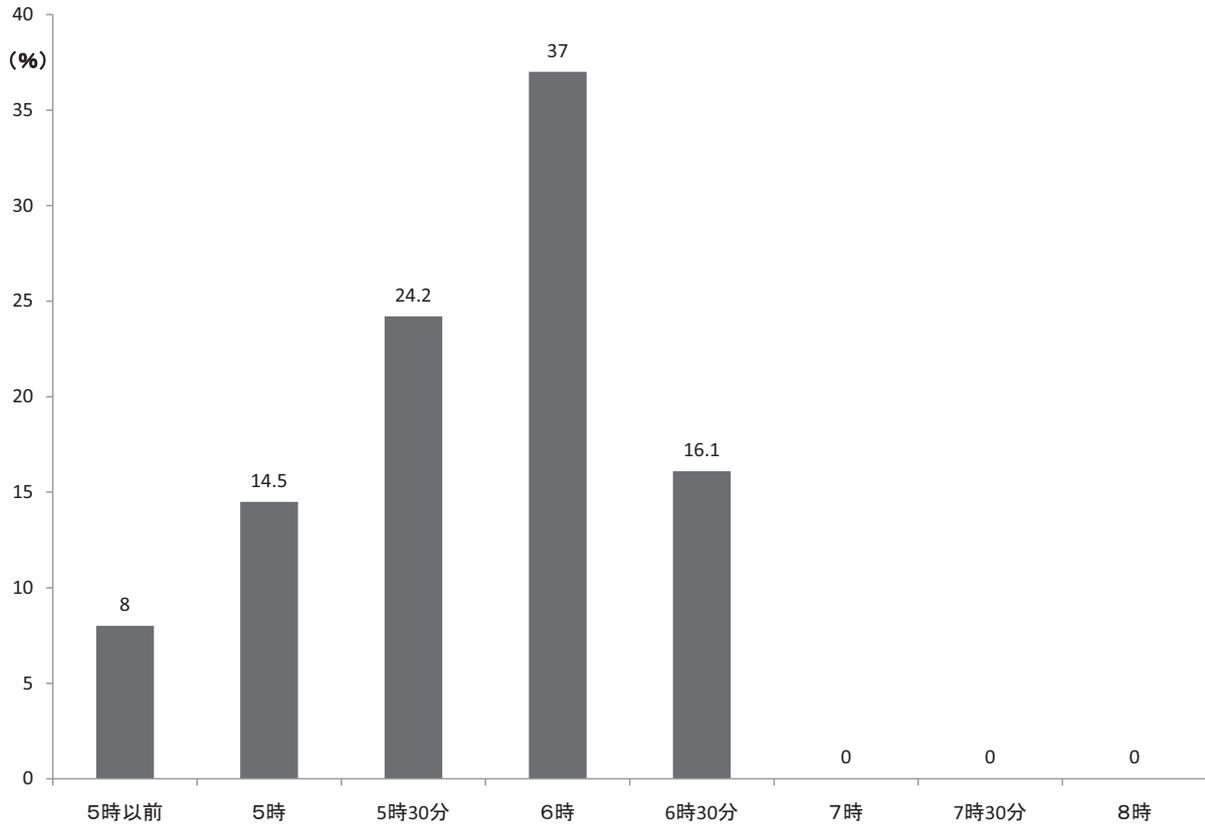


図 2 . 起床時刻

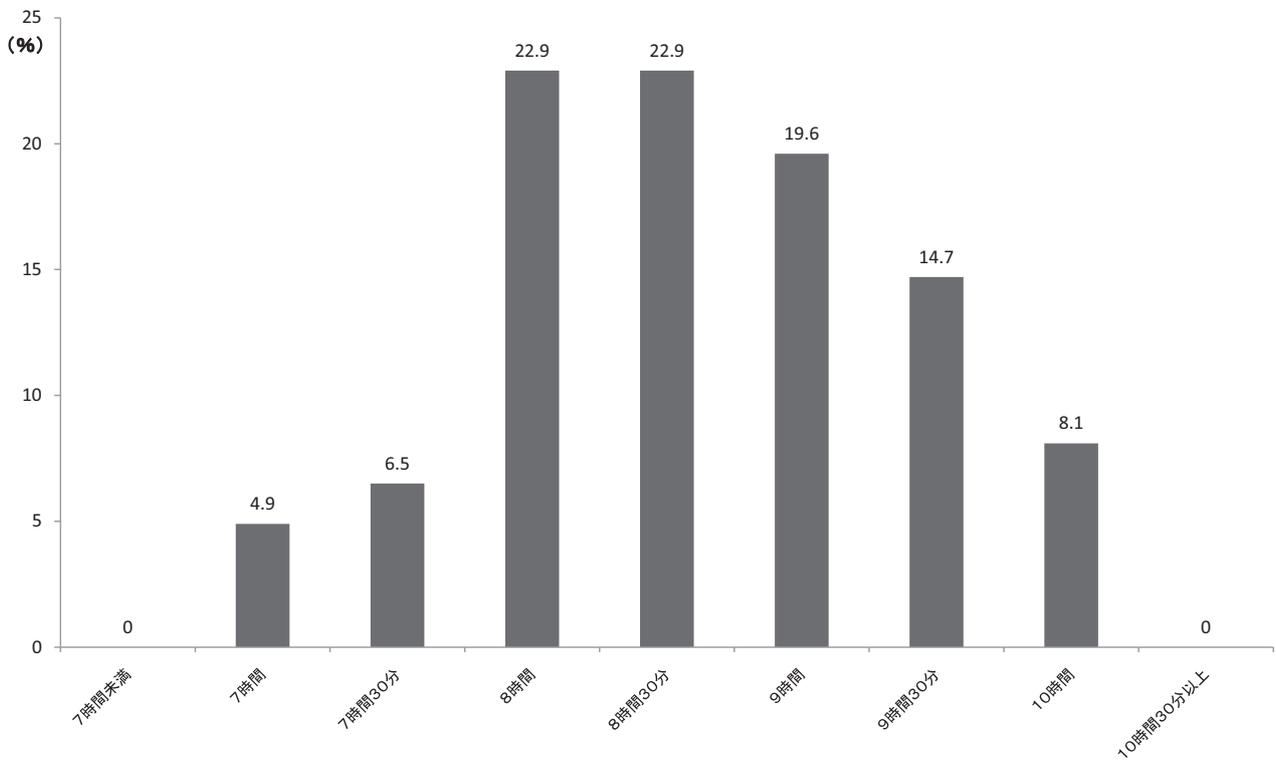


図 3 . 睡眠時間

の調査によると「昨日、何か家の手伝いをしたか」という問いに対し「全然していない」という子が中学2年生で63.4%を占めている。また、日本青少年研究所(2000)の高校生を対象とした調査では「あなたはふだん家の手伝いをしますか」という質問に、「ほとんどしない」「全くしない」と答えている生徒が米国9.1%、中国9.9%に対して日本の場合3倍近い29.9%もいる。カンボジアの中学生はどうか。図4は、ふだんどんな手伝いをしているか質問した結果(複数回答)を示したものである。問い方は違うが、手伝いをしていないという生徒はいない。「食事づくり」をはじめ様々な手伝いをしていることがわかる。

### (3) なりたい職業について

日本の場合、Benesse 教育研究開発センター(2005)によると、「なりたい職業」について「ない・無回答」という子が中学生で38%を占めている。「なりたい職業」がある子についてその職種を見ると、男女とも非常に多様だ。その中でも男子で比較的多いのは野球選手(3.7%)、次いでサッカー選手(2.2%)、学校の先生(2.2%)、医師(1.8%)の順である。女子では保育士・幼稚園の先生(9.7%)、

看護師(3.8%)、マンガ家・イラストレーター(3.8%)、芸能人(3.4%)の順となっている。カンボジアの中学生の場合、「わからない」は1.6%で、ほとんどの子が何らかのなりたい職業を挙げている。その中では「先生」「医師」が圧倒的に多いことが注目される(図5)。しかし、職業選択の多様性という点からすると、日本の子ども達に比べ非常に狭い。おそらく、その理由は、カンボジアは発展途上、それも大変厳しい状況にあり、周囲の大人が携わっている仕事の種類が限られていること関係しているのではないかと考えられる。

### (4) 学校に対する気持ち

日本の場合、日本青少年研究所(2000)の調査によると、「学校生活は楽しい」と感じている中学生が「全くそう思う」「まあそう思う」を合わせて75.7%いる。しかし、その一方で「この世から学校がなくなればよい」という中学生も「全くそう思う」「まあそう思う」を合わせて41.4%を占めている。学校に対して複雑な気持ちをもっているようである。これに対して、カンボジアの場合、「学校は好きですか」という質問に全ての子が学校が「好きだ」と答えている(図6)。カンボジアでは、各国のNGO

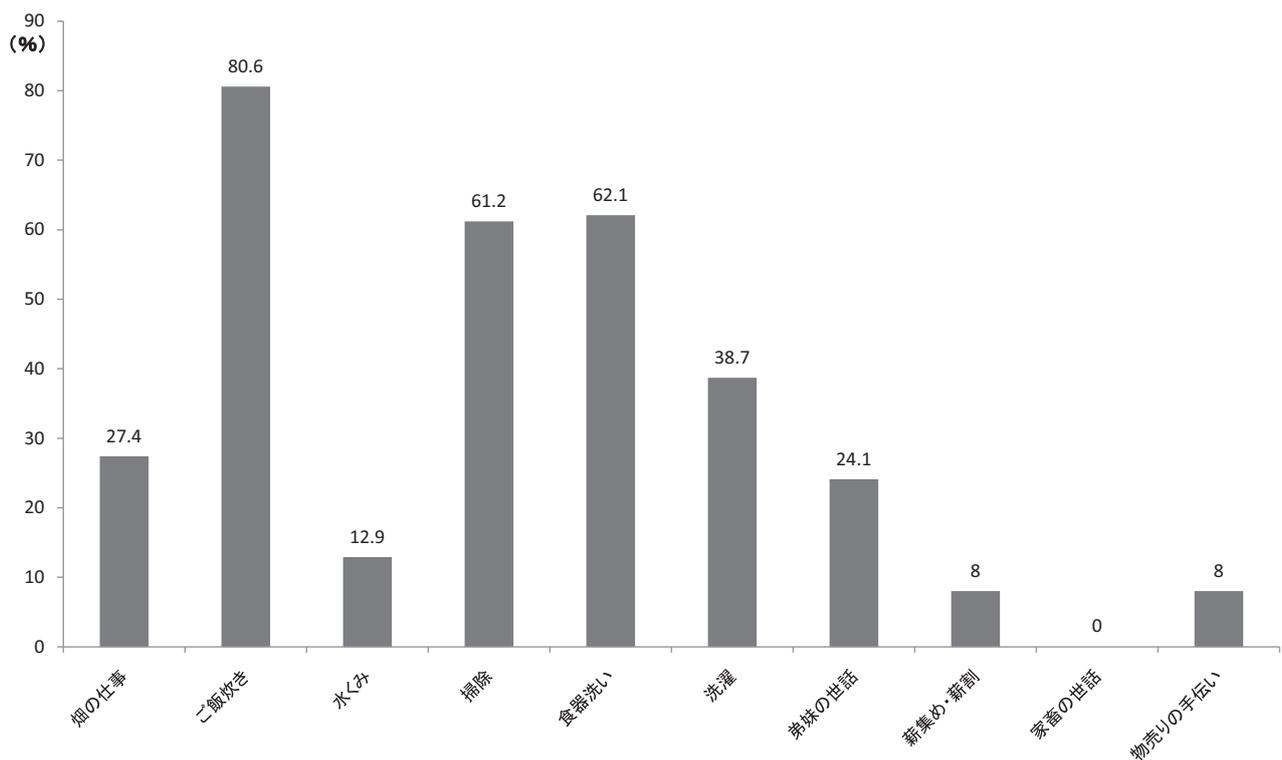


図4. 主な手伝い

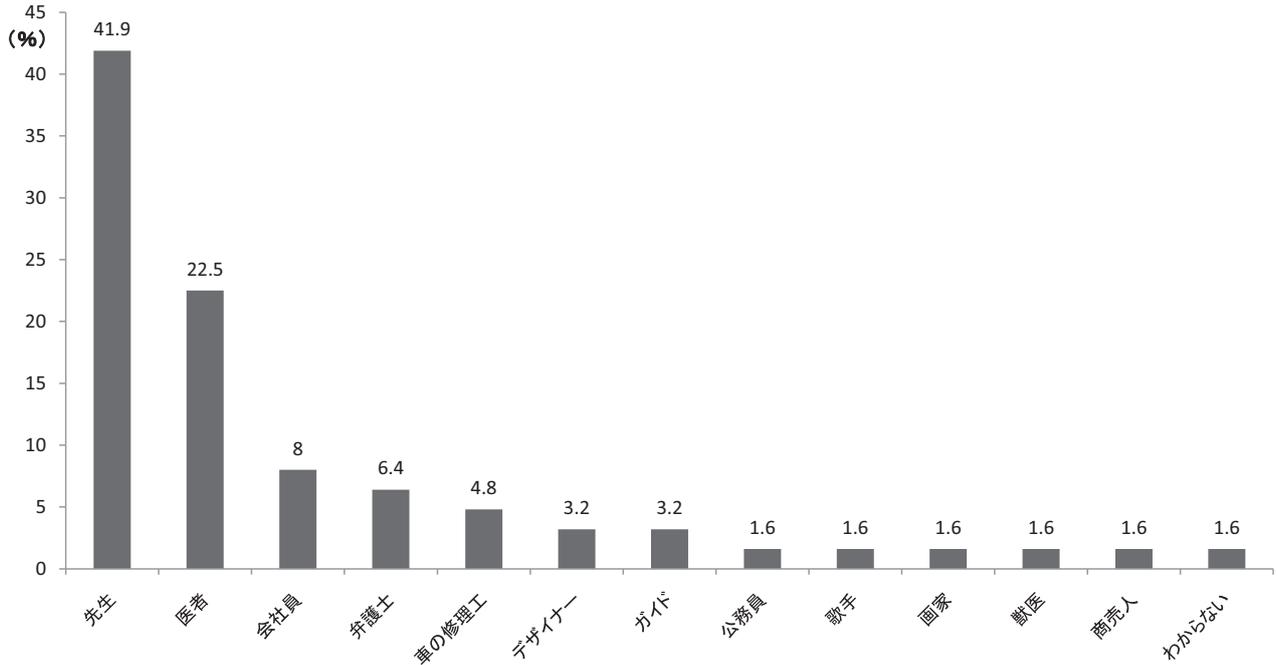


図5. なりたい職業

等の支援で建物としての「学校」はたくさんできてきている。しかし、しかし、理科室や音楽室、体育館があるわけではない。設備、教具もない。しかし、そこには仲間がおり、先生がおり、勉強がある。多くの子ども達にとっては中学校に通えるだけで幸せなのである。

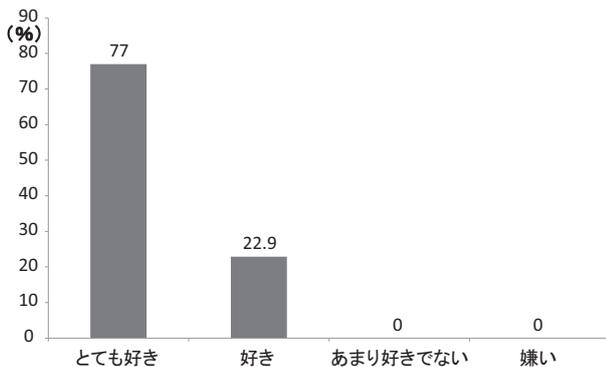


図6. 学校に対する気持ち

##### (5) 教師と父親に対する尊敬の程度

子どもは、年長の人、自分を育ててくれる人、自分に物事を教えてくれる人を尊敬することができれば、その教えを受け入れ、学ぶことができる。自分を律し、高めることができる。しかし、例えば、子どもの前で親が教師を安易に批判したり、否定したりしては、教師と子どもの信頼関係が築けなくなるばかりでなく、教師の教えを軽んじ、結果として子

どもの学力は高まらず、規範意識も育たなくなるだろう。こうした尊敬の心は年齢とともに自然に身につくものではない。子どもが幼い時から親や教師自身が態度で示すと同時に、折にふれ、きちんと教えてやるのが大切である。ところが、日本では戦後「尊敬」の心は教育界において軽視、あるいは否定され、子ども達の教師や親に対する尊敬度は他の国の子ども達のそれに比べ驚くほど低くなっている。例えば、李仲濱・横山正幸（2002）は中国と日本の小学校6年生を対象に教師に対する尊敬意識を調べた。その結果、中国の6年生では、「あなたは先生を尊敬していますか」とい質問に対して84.4%の子が「とても尊敬している」と答えていた。これに対して日本の子どもでは「とても」が32.8%、「まあまあ」が20.1%で、合わせても尊敬している子は52.9%と大きな違いが見られた。社会心理学者の東洋大学教授中里至正ら（1997）も日本の他、中国、韓国、米国、トルコの中学生・高校生を対象に父親に対する尊敬意識の調査を行っている。その結果を見ると、「父親を尊敬している」という割合は中国96.9%、韓国64.9%、米国73.9%、トルコ96.6%に対して日本は45.1%であった。また、「父親のようになりたい」については中国58.3%、韓国41.4%、米国69.2%、トルコ75.4%に対して日本は21.2%であった。カンボジアの中学生の場合はどうだろうか。

図7、図8が示すように教師に対しても父親に対しても尊敬度は極めて高い状態にある。中学2年生といえば、いわゆる第二反抗期の真っただ中にあり、最も扱いにくい時期の子ども達である。しかし、学校での授業態度は、非常に好ましい状態にある。授業中、勝手な言動をしたり、よそ見をしているような子はまずいない。

カンボジアの教師は教師として十分なトレーニングを受けているわけではない。したがって、日本の教師に比べると授業方法も概して未熟である。それでも授業中、好ましい状態が保たれている。その背景には、ここで明らかとなった教師に対する高い尊敬意識が関係しているのではないかと考えられる。

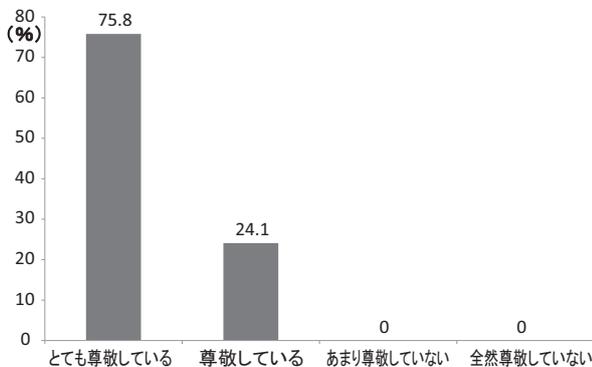


図7. 教師に対する尊敬の程度

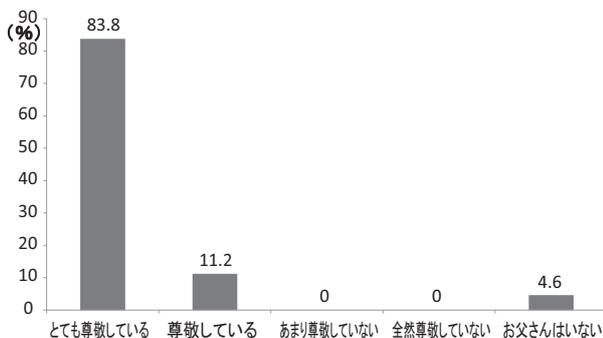


図8. 父親に対する尊敬の程度

#### (6) 幸せ感

Benesse 教育研究開発センター (1997) が、世界6都市の小学校5年生を対象に行った調査では、「幸せ」と感じている子の割合は、北京 93.7%、オークランド81.6%、サンパウロ78.2%、ソウル78.2%、ミルウォォキー73.0%、東京57.0%と、日本の子が最も低くなっている。また、UNICEF Innocent Research Centre (国連児童基金イノチェンティ研究センター) も経済開発協力機構 (OECD) に加盟

している21カ国の子ども達の幸福度をランクづけしている。ただ、日本については比較しうる十分なデータがないということで順位が示されていない。但し、孤独感については、他の国の15歳の平均が7.4%であるのに対して、29.8%とずば抜けて高い割合を示している。さて、カンボジアの子ども達についてはどうだろうか。図9が示すように圧倒的に多くの子が「幸せ」と答えている。「あまり幸せでない」と答えている子は4.8%で、「全く幸せでない」という子は皆無である。なぜ幸せだと思うのだろうか。調査ではその理由を書いてもらった。それをまとめたのが図10である。これを見ると、「家族」がキーワードになっている。子ども達は経済的に貧しくとも、家族と共に生活できることが一番の幸せだと考えているのである。実際、カンボジア人の生活を見ていると親子、兄弟姉妹、親戚の絆が今の日本では想像できないほど強いことがわかる。筆者はカンボジアの子ども達の教育を支援する活動の過程で、これまで多くの若者達と交流の機会を得たが、そこで彼らの親や兄弟姉妹を思う場面に遭遇し、強く心うたれることが度々あった。

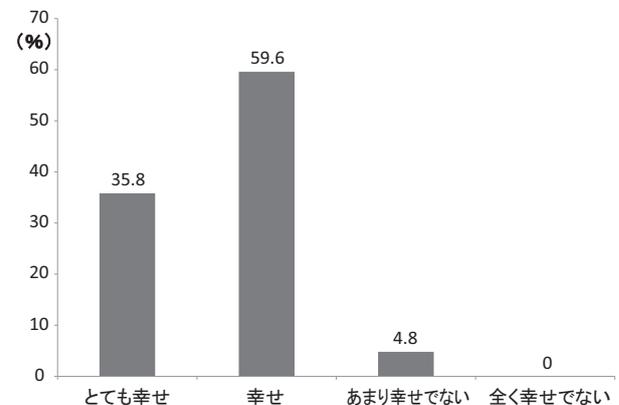


図9. 幸せ感

#### (7) 神様 (仏様) への3つの願い

横山正幸他 (1998, 2003) は、1996年から今日まで繰り返し、中国の新疆ウイグル自治区やトルコ共和国を訪問し、現地の子どもの生活について臨地調査を行ってきた。彼らの世界には日本のような深刻ないじめや不登校がない。調査は、その理由を探るためであった。その調査の過程で、子ども達に「神様が三つだけ願いをかなえて下さる」と言われたら何をお願いするか質問してみた。図11がその結

果である。日本の子ども達なら、圧倒的に多いのが「お金」や「ゲームのソフト」など「物」である。ウイグルやトルコの子ども達の場合、そうした願いはほとんど出てこない。親やきょうだい健康であること、自分の周りの人が幸せになること、国の発展、友達がいっぱいできること、自分が健康であること、立派なお医者になって人の役に立つこと、お父さんの仕事のための車、国が平和であることなどである。自分のことだけでなく、周りの人々の幸せを願う子が多いのである。今回、カンボジアの子ども達にも同様の質問を試みた。ただ、カンボジアは仏教国なので、アンケートでは「神様」を「仏様」に変えて尋ねている。カンボジアの子ども達の場合、多くの子がまず挙げているのは家族についての願いである。「勉強ができるようになること」など自分についての願いも高い割合で見られる。しかし、これも良い成績をとって将来いい仕事につき、親や家族を幸せにしてあげたいという思いからのようだ。また、「バイクや車が欲しい」というのも自分が遊ぶためではない。カンボジアでは、バイクは仕事に行くための移動手段として生活上必需品だからである。家族についての願いが多いということと、(6)で述べたように最も多い幸せの理由が「家族」である

ということとは、子ども達の心の根底で密接につながっているようである。

#### 4. おわりに

今回の調査はサンプル数も少なく、ここで明らかにされた結果はあくまでも限定的なものである。したがって、カンボジアの中学生的実態として普遍化できるものではない。しかし、そうだとした場合も日本の子ども達の現状と照らし合わせながら見ていくと、カンボジアの子ども達の生活と意識は日本の子ども達よりかなり「健康的」な感じがする。振り返ってみると、日本でも先生や親を尊敬し、早寝早起きで、積極的に家の手伝いもし、家族の絆がしっかりしていた時代が1960年頃まではあった。

経済的に豊かなことは素晴らしいことである。しかし、前掲のUNICEFの報告書でも指摘されているように、GDP（国内総生産）の程度と子どもの主観的な「幸せ感」とは必ずしも関係していないようである。

今後はサンプル数や質問項目を増やし、このテーマに関してより確かな実態を明らかにしてみたいと思う。

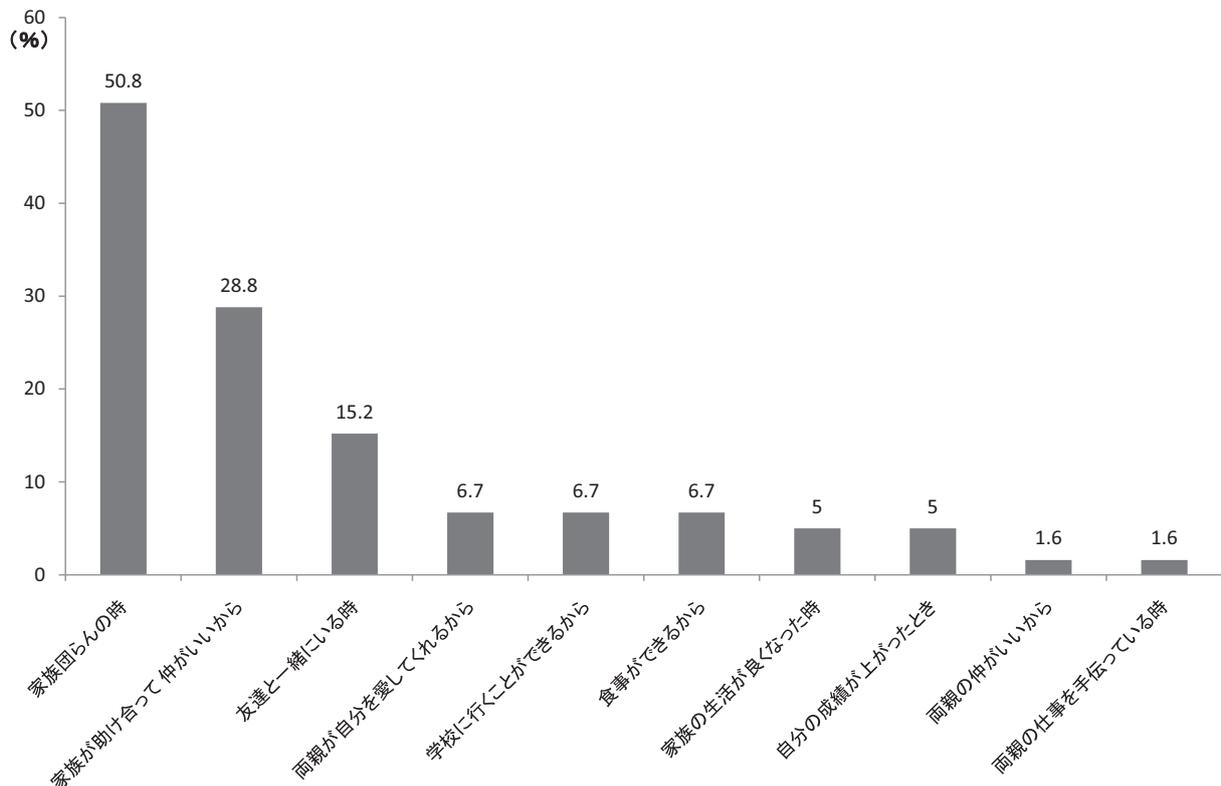


図10. 幸せを感じる理由(幸せな時)

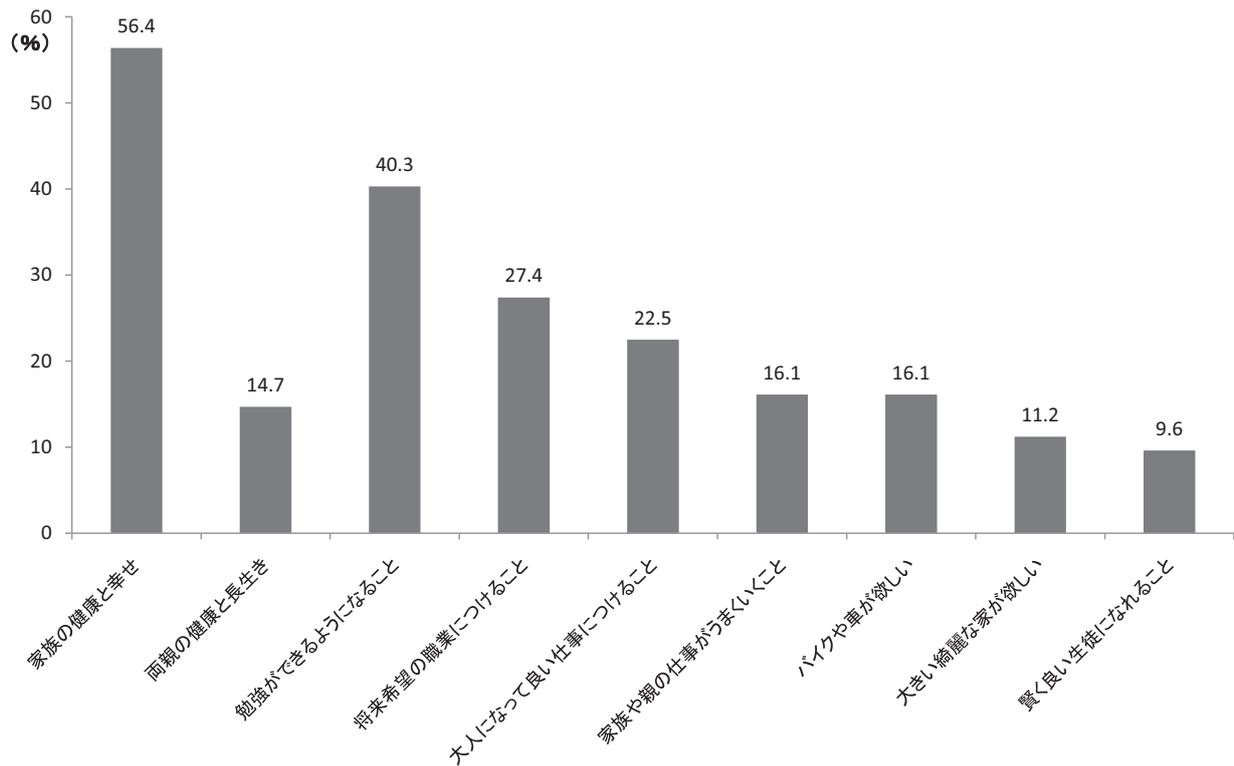


図11. 仏様への3つの願い

#### <引用文献>

- 北九州市教育委員会 2000 北九州市家庭教育意識調査  
 北九州市立教育センター 2005 第2回北九州市学校教育実態調査報告書  
 園原太郎他 1952 学童の生活時間に関する調査 京都大学文学部研究紀要, 第一, 131-171.  
 中里至正・松井洋 (編著) 1997 異質な日本の若者たち プレーン出版  
 日本青少年研究所 2000 中学生・高校生の日常生活に関する調査  
 福岡県 2001 青少年に関する意識及び行動調査  
 福岡県岡垣町教育委員会 2002 岡垣町の子どもの生活と意識の実態  
 Benesse 教育研究開発センター 1997 別冊モノグラフ・小学生ナウ「第5回 - 国際教育シンポジウム報告書 -」

- UNICEF Innocenti Research Centre 2007 Child poverty in perspective: An overview of child well-being in rich countries  
 横山正幸 (編著) 1998 いじめのない子どもたちの世界 北大路書房  
 横山正幸・横山あづま 2003 学校大好き - 笑顔輝くトルコの子ども達 - 清流出版  
 李仲濱・横山正幸 2002 日本と中国の子どもの尊敬意識の比較 教育実践研究 第10号 113-120.

#### 付記

本論文は、筆者が代表を務める任意団体「カンボジアの子ども達の教育を支援する会」のホームページに掲載した同名の調査報告を加筆・修正したものである。